The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	談話における非言語行動の一側面 : 首振り動作・視線と談話との関係について
Author(s)	山田, 美樹
Citation	阪大日本語研究. 1992, 4, p. 33-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

談話における非言語行動の一側面

——首振り動作・視線と談話との関係について——

An Aspect of Non-Verbal Communication

——The Relation of Nodding & One's Eyes with Conversation——

山　田　美　樹

YAMADA Miki

キーワード：首振り動作〈Fタイプ（前振り）・Bタイプ（後振り）〉，打点，始点，談話の進展，視線

1. は　じ　め　に

コミュニケーションの成立には，言語行動と並んで首振り動作・視線・顔の表情・手の動きなど，様々な非言語行動が不可欠な要素となっている。本名（1989）によると，動作学（Kinesics）の祖と言われるバードウイッスル（R. L. Birdwhistell）は，伝達行動の中で言語が占める割合はわずか30～35%しかないと計算しており，心理学者，メーラビアン（A. Mehrabian）の場合は，メッセージの55%が顔の表情，38%が声調（トーン・ピッチ・イントネーション etc.）によって伝達され，言語による伝達はわずか7%にすぎないと判断しているという。すなわち，「非言語伝達は，言語伝達に対して，補助的あるいは相補的役割を果たすだけではなく」（本名・1989），独立したものとして考える必要があると思われる。

日本においては，1970年代後半以降，対照研究や社会言語学等の分野で非言語行動の分析が進められるようになり，日本語教育の分野でも最近，その重要性が指摘されるようになってきた。メイナード氏・杉戸氏は「あいづち」行動という聞き手の行動を中心に非言語行動の機能を分析し，共に非言語行動が談話の流れと深く関わっているという結論を得ている。

本稿では非言語行動の中で，メイナード(1985)，杉戸(1988)，松田(1988)でも取り挙げられている「首振り動作」(頭部の縦振り動作とそれに準ずる上半身の動き）について，話し手・聞き手の行動両面について分析したい。また発話の受継ぎ・視線と談話の進展との関係についても同様に考えていきたい。

2. 資料について

2－1　資料作成にあたって

談話における非言語行動の現われ方は，性差・年齢差・地域差などの様々な社会的要因と深く関わり合っていると思われる。杉戸氏は，身体部位の動き方やその動きの程度について，「同一の文化・社会を背景とする複数の個人間に，（中略）一定の共通理解・共通判断は存在し得る。」(1978)と述べ，非言語行動を研究する上で，社会的要因を充分考慮しなければならないことを示唆している。

社会的要因として考えられるものには「話し手と聞き手との関係（社会的地位，役割的関係，年齢差，親疎等)，場面（フォーマル／インフォーマル，第三者や聴衆の有無等)，媒介（電話，マイク等)，地域差，あいづち使用者の年齢，性別」(松田・1988）等がある。こういった個々の社会的要因に関する総合的な分析が必要であるが，本稿では以下のように被調査者を選定して資料を作成した。

2－2　被調査者について

今回の資料の収集にあたって，協力を得た各被調査者は以下のとおりである。但し，Nは日本人学生を，Rは留学生を表すものである。

【日本人学生】

	生　年	性　別	出生地	生　育　地
N 1	1968	女	奈良県	奈良県
N 2	1968	女	奈良県	奈良県
N 3	1968	女	大阪府	大阪府
N 4	1968	女	広島県	鳥取県・徳島県

N 5	1967	女	神奈川県	マレーシア・大阪府
N 6	1968	女	愛知県	愛知県
N 7	1969	女	島根県	島根県
N 8	1968	女	埼玉県	埼玉県・茨城県
N 9	1967	女	大阪府	大阪府
N10	1966	女	千葉県	千葉県

【外国人留学生】

	生年	性別	出身国	日本語学習経験（収録当時）
R 1	1967年	女	ブラジル	ブラジル3年・日本1年6カ月
R 2	1970年	女	オーストラリア	オーストラリア5年・日本3カ月

以上，日本人については，20代前半の女性（大学生）に焦点を絞った。また地域差を考慮するために，出身地・生育地も併せて記載することにした。留学生については，ケース・スタディーとして，日本人学生との違いを観察するに留めることにした。

2－3　資料の収集方法

本稿では，前述の被調査者2名ずつの対話について調べることにした。対話に注目した理由は，非言語行動を行う主体と，それが向けられる相手とが明示されるからである。

資料を作成するために実際の対話の場面をビデオカメラで撮影することにした。撮影は2人の対話者が同一の画面に収録されるように録画機器等を配置して，それぞれ個別に行った。配置の仕方は基本的には右図のとおりだが，撮影場所によって多少差がある。尚，被調査者には，自由に話題を選んで話してもらい，各話者がビデオカメラに慣れてきたと思われる部分を選んで分析を行なった。収録時間はそれぞれ10分から20分位であった。但し，撮影の際，観察者は同席しないものとした。

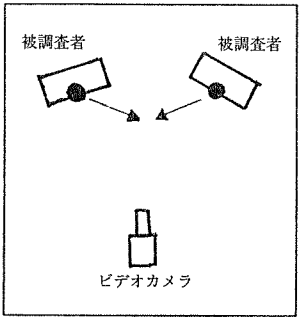


図1

2-4 資料の内容

今回，分析に使用した資料は次のとおりである。但し，各録画資料からそれぞれ3分間ずつ分析に使用した。撮影場所は全て大阪大学構内である。

	対話者	対話者間の関係	対話の内容(話題)・進行	収録日時・場所
資料1	N 1 N 2	同じ学科の親しい友人同士	就職・結婚について。双方が意見を述べ合っている。	1990年10月18日 日本学棟101号室
資料2	N 1 N 3	同　上	新作アメリカ映画とその主演俳優について。ボーリングについて。話が盛り上がらず，停滞している。	1990年6月19日 日本学棟105号室
資料3	N 1 N 4	同　上	人気歌手の新作CDについて。主に，N1 が話し手になっている。	1990年6月19日 日本学棟105号室
資料4	N 3 N 4	同　上	N3 のフランス語学習体験とN4 の英会話教室での体験について。双方がそれぞれの体験を語っている。	1990年10月19日 日本学棟203号室
資料5	N 4 N 5	同　上	献血について。卒論について。会話が途切れがちである。	1990年11月22日 日本学棟101号室
資料6	N 4 N 6	同じ学科だが，特別親しくはない友人同士	卒論について。就職活動について。主に，N6 が話し手になっている。	1990年10月19日 日本学棟203号室
資料7	N 7 N 8	同　上	就職後の勤務地について。東京生活について。関東出身のN8 が終始話し手にまわっている。	1990年10月19日 日本学棟203号室
資料8	N 9 N 1	同　上	卒論について。ゼミの先生について。主に，N9 が話の主導権を握って話を進めている。	1990年11月22日 日本学棟101号室
資料9	N 4 R 1	同じ学科の大学院生・R1 と顔見知り程度のN4 の対話	R1の母国について。N4の卒論のテーマについて。双方が話し手になっている。	1990年9月14日 日本学棟405号室
資料10	N 4 R 2	同じ学科で比較的親しい友人同士	R2 の夏休みの旅行計画について主に，R2 が話し手になっている。	1990年6月26日 日本学棟105号室
資料11	N 5 R 2	同じ学科の比較的親しい友人同士	R2 が日本橋で，アメリカの有名な歌手のバンドマンにコンサートチケットをもらったことについて。主に，R2が話し手になっている。	1990年6月26日 日本学棟105号室

2-5 資料の整理

国立国語研究所では，1970年代末から南不二男・江川清・米田正人・杉戸清樹各氏によって談話行動の全体的・総合的なテクストの作成が試みられ，既にいくつかの試案を得ている。本稿では，それらの試案を参考にし

つつ，以上の要領で収録した録画資料を次のような方法で資料にまとめ，整理した。但し，言語形式は基本的に平仮名表記とし，首振り動作についてはコミュニケーションの意図の有無に関わらず観察可能な限りすべて記録することとした。（下例はすべて資料3〔2－4参照〕による）

①収録した録画資料の中から各話者がビデオカメラに慣れてきたと思われる部分を3分間選ぶ。

②①で選んだ部分を文字化する。

N1　せっかかくデビューしたんだったらうまくいってほしいやーん

N4　　んー　　んー

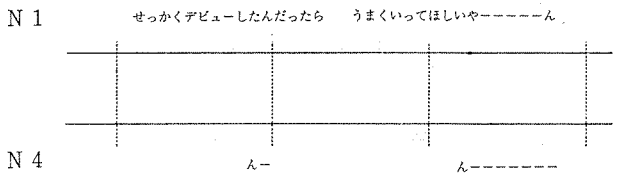
③ビデオを見ながら，②の文字化資料を画面表示カウンターで1秒毎に区切る。

N1　せっかくデビューした／んだったらうまくいって／ほしいやーん

N4　　んー／　　／んー

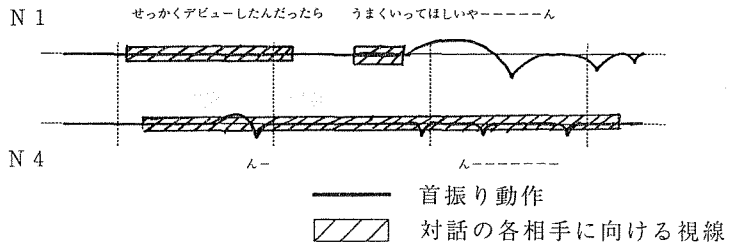
④「平常の頭部の位置」を示す基準線を引き，その基準線上に等間隔で印を付けていく。（印から印までを1秒間とする。）

⑤基準線上の印に合わせて，③の文字化資料を書き加える。



⑥ビデオを見ながら，下図の要領で首振り動作を基準線上に書き込む。

⑦ビデオを見ながら，各話者がそれぞれの対話の相手に視線を向けている箇所を⑥上に斜線で書き加える。



3. 首振り動作の分析

3－1　首振り動作の単位

非言語行動の単位設定は，従来より現在に至るまで様々な方法が試みられてきた。杉戸氏は，その単位設定の難しさについて，「具体的な身振りのどこからどこまでをひとつの単位として，前後の身振りから切り離してとらえるかは，多くの場合，客観的な指標によりにくい作業である。身体的な動きが基本的に連続的なものであることに由来する困難なのであろう。」(1987・国語研報告92) と述べている。

本稿では，首振り動作の単位として「頭部（首より上，ないし上体）が前後に傾き1回ないし数回往復する動き」(杉戸・1988) という設定基準を用いることにした。但し，うつむく，上向くといった何らかの静止状態を含む動作（姿勢の変化）についてはこれを一切省くこととし，動作の大きさ・速さも無視した。また，前述の1/10倍速スローモーションの画面で見て，連続的な動作と思われるものはそれが静止するまでを一単位とした。但し，姿勢の変化と動作，動作の連続・非連続等の境目の判定について，多少なりとも恣意的な面があることは否めない。

3－2　首振り動作の分類

3－2－1　分類にあたって

杉戸氏の『身ぶりのあいづち研究』(1988) では，言語行動を「実質的な発話」と「あいづち的な発話」に分け，それぞれの発話別にそれと共起する「身ぶり（うなずき）」について分類を行っている。発話の種類による分類について杉戸氏は，「実質的な発話」に並行して行う身振りは，「自分自

身の発話に対して調子をとったり，強調したり，相手に念を押すように語りかけたりする際に現われる」もので，あいづちに共起する身振りとは区別すべき動作であると説明している。

本稿では，談話の題目と直接関わる発話と間接的に談話の進行を助ける発話では，首振り動作の使われ方に差が見られるのではないかと仮定し，首振り動作を共起する言語行動との関わりによって分類することにした。以後，「実質的発話」と「あいづち的発話」については以下のとおり，杉戸（1988）に準ずることにする。

『あいづち的な発話』

ハー，アー，ウン，ソーデスカ，ソーデスネなどの応答詞を中心にした発話。先行する発話をそのままくりかえすオーム返しや単純な聞返し。エーッ，マアー，ホーなどの感動詞だけの発話。笑い声。つまり，実質的な内容を表現する言語形式（上の，たんなるくりかえし以外の名詞，動詞など）を含まず，また判断，要求，質問など聞き手に積極的な働きかけもしないような発話。

『実質的な発話』

上の，あいづち的な発話以外の種類の発話。なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含んで，判断，説明，質問，回答など，事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話。

——（以上，杉戸・1988より）——

3－2－2　首振り動作の分類

実際の談話の中で人間は，実に様々な首振り動作を行っている。一見無数に見える首振り動作だが，実際に録画資料を観察していくと，首振り動作は大きくふたつに分けられることがわかった。本稿では，この点に着目して首振り動作を以下のように分類することにした。但し，Fは Front（うなずき＝前振り）を，Bは Back（顎を上て頭を後へ倒す動作＝後振り）を表す。また，あいづち的発話には首振り動作を伴わないあいづち的発話も見られ，これについては「無動」と表すことにする。

《首振り動作の種類》

〈Fタイプ〉F 1…1回うなずく

F 2…2回うなずく

F 3…3回以上うなずく

bF…うなずく前に頭を後へ倒し，勢いをつけてからうなずく。

〈Bタイプ〉B 1…1回頭を後へ倒す

B 2…2回頭を後へ倒す

B 3…3回以上頭を後へ倒す動作を繰り返す

fB…頭部を前に振り，勢いをつけてから頭を後へ倒す（引く）。

3－3　首振り動作の量的分析

3－3－1　実質的発話の場合

以下，各発話ごとに首振り動作の出現量の総計と各動作の出現量全体に対する割合を，日本人学生・留学生それぞれについて示す。尚，各資料ごとの首振り動作の出現量に関する表は後に添付する。その際，参考までに各話者の発話量（モーラで表記）を並記した。

〈表1〉【日本人学生】

	全体数	F1	F2	F3	bF	B1	B2	B3	fB
総　計　(回)	727	247	36	10	276	117	24	1	16
割　合　(%)	100	34.0	5.0	1.4	38.0	16.1	3.3	0.1	2.2

〈表2〉【外国人留学生】

		全体数	F1	F2	F3	bF	B1	B2	B3	fB
総計(回)	R1	71	15	1	—	8	35	5	6	1
	R2	95	31	4	3	25	25	4	1	2
割合(%)	R1	100	21.1	1.4	—	11.3	49.3	7.0	8.5	1.4
	R2	100	32.6	4.2	3.2	26.3	26.3	4.2	1.1	2.1

実質的発話と共起する首振り動作をタイプ別に見てみると，日本人学生〈表1〉の場合，Fタイプ（F1・F2・F3・bF）だけで全体の78.3%を

占めている。また，個々の首振り動作に目を向けてみると，Ｆタイプの中でも特にＦ１とｂＦの割合が高く，更にＢタイプのＢ１を加えると，Ｆ1・ｂＦ・Ｂ１の３種類だけで全体の 88.0%に上ることがわかる。

次に留学生（R1・R2）の場合〈表２〉を見てみると，Ｆ1・ｂＦ・B1の３種類の割合が高くなっている点は，日本人学生と同様である（Ｆ1・ｂＦ・Ｂ１だけで全体の 83.7%)。しかしＦタイプの占める割合は全体の 52.4%とかなり低くなっており，代わりにＢタイプの比率が高まっている。特にＲ１にその傾向が強い。

3－3－2　あいづち的発話の場合

〈表３〉【日本人学生】

	全体数	F1	F2	F3	bF	B1	B2	B3	fB	無動
総計(回)	922	307	145	107	132	26	6	4	30	75
割合(%)	100	43.1	15.7	11.6	14.3	2.8	0.7	0.4	3.3	8.1

〈表４〉【外国人留学生】

		全体数	F1	F2	F3	bF	B1	B2	B3	fB	無動
総計	R1	36	2	1	1	2	3	5	20	—	2
(回)	R2	40	14	9	8	4	—	—	—	2	3
割合	R1	100	5.6	2.7	2.7	5.6	8.3	13.9	55.6	—	5.6
(%)	R2	100	35.0	22.5	20.0	10.0	—	—	—	5.0	7.5

日本人学生〈表３〉の場合，あいづち的発話と共起する首振り動作は，Ｆタイプに偏っており，Ｆタイプだけで全体の 84.7%を占めている。一方，留学生〈表４〉の場合を見てみると，Ｒ２は日本人同様，Ｆタイプが全体の 87.5%を占めているが，Ｒ１の場合はわずか 16.6%に過ぎない。Ｒ１には，実質的発話も含めて，日本人にはあまり見られない顎をしゃくりあげるような動作（Ｂタイプ）が多く見られるようである。

また，首振り動作を伴わないあいづち的発話（表中の「無動」）の現れる割合は，〈表３〉・〈表４〉を見る限り，日本人学生と外国人学生で殆んど差はないようである。しかし，個々の資料に目を移すと，話題に行き詰ま

り話が進展しない対話では，かなり「無動」の割合が高くなっている。(ex. 資料 2etc. 添付資料参照）このことから，「無動」のあいづち的発話は談話の進展度（盛り上がっているか等）と何らかの関係があるものと思われる。

3－4　首振り動作の頻度

3－4－1　頻度の算出にあたって

本稿では，首振り動作の頻度について，時間・モーラ数の両面から算出する方法をとった。但し，各被調査者の実質的発話時間と実質的発話の総量（モーラ数）を基準として頻度を算出した。各資料毎の頻度については，添付資料を参照されたい。

3－4－2　実質的発話の場合

各資料について，時間・モーラ数の両面から首振り動作の頻度を算出した結果，話し手が自らの実質的発話に添える首振り動作は，日本人学生の場合，平均 2.12 秒に 1 回，15.39 モーラに 1 回の割合で行われていることがわかった。この数値は，水谷氏の「日本語の個人的な話し合いでは，（中略）約20音節ぐらいで一たん休止してあいづちを待つ」(1988) という指摘とほぼ一致している。

〈表 5〉

		頻度(秒/回)	頻度(モーラ/回)
平　均		2.12	15.39
資料 1	N2	2.59	19.20
資料 2	N1	2.22	17.00
	N3	4.40	32.19
資料 5	N5	3.59	29.77
資料 8	N9	2.36	19.04

個々に見ていくと，平均値に比べて頻度がかなり低いケースがあることに気付く（左表 5 参照）。無論，個人差の可能性もあるが，複数の資料に登場する N1・N3・N 5 について他の資料と比較してみれば明らかに〈表 5〉では頻度が下がっている。

N 1 …1.96 秒/回・12.39 モーラ/回（資料 1）
　　1.97 秒/回・14.29 モーラ/回（資料 3）
N 3 …2.33 秒/回・16.39 モーラ/回（資料 4）

N 5 …1.48 秒/回・10.82 モーラ/回（資料11）

ところで，表中の資料 2・資料 5 は共に話題が尽き盛り上がりに欠ける対話である。このことから話し手が自らの実質的発話に添える首振り動作の頻度は，その話題の進展度を知るひとつの尺度となり得るものと考える。

尚，外国人留学生の場合，首振り動作の頻度に日本人学生との差は見られなかった。

R 1 …1.46 秒/回・ 8.31 モーラ/回（資料 9）

R 2 …2.02 秒/回・10.66 モーラ/回（資料10）

2.39 秒/回・13.04 モーラ/回（資料11）

3－4－3　あいづち的発話の場合

あいづち的発話と共起する首振り動作の頻度については，対話の相手の実質的発話時間・総量（モーラ数表示）を基準とした。但し，ゼロ形式として首振り動作を伴わないあいづち的発話（3－3－2「無動」）も数値として含まれている。

このようにして平均頻度を求めた結果，日本人学生は平均 1.79秒に 1 回，12.62 モーラに 1 回の割合で首振り動作を行っていることがわかった。この数値は，水谷（1988）における「平均15～20/分（11～26回）」という調査結果に比べると，かなり頻度が高くなっている。（1.79秒/回＝33.52回/分）これは水谷氏が音声的あいづちのみを調査対照としたことに大きな原因があるものと思われる。

今回の調査で，あいづち的発話中に「音声を伴わない首振り動作」が現れた回数は，全体では 235 回に上り，各被調査者が資料中（3 分間）で平均 10.68 回行っていることになる。また，その割合はあいづち的発話中の全首振り動作の 22.82% を占めており，無視できない。水谷氏の調査結果にこの「音声を伴わない」あいづち行動を含めれば，その頻度は本稿の調査結果に類するものになったと思われる。またその他の社会的要因（性・年齢・親疎等）が関与しているも可能性についても考慮する必要があるだろう。

次に，あいづち的発話中の首振り動作の平均頻度と，前述の実質的発話

中の首振り動作の平均頻度を比較してみる。すると，日本人学生の場合，実質的発話中に比べてあいづち的発話中の方がその頻度が高くなることがわかった。

実質的発話中の平均頻度……2.12 秒/回・15.39 モーラ/回

あいづち的発話中の平均頻度……1.79 秒/回・12.62 モーラ/回

すなわち，日本語の談話においては，話し手になったとき以上に聞き手になったときに，より積極的な行動をする傾向があるのではないだろうか。更に興味深いことに，前述の「実質的発話中の首振り頻度」が低い人の対話の相手は，あいづち的発話中の首振り動作の頻度がかなり低くなっていることもわかった。

N 1（資料 2）…2.43 秒/回・17.79 モーラ/回

N 3（資料 2）…2.71 秒/回・20.72 モーラ/回

N 4（資料 5）…2.48 秒/回・18.71 モーラ/回

N10（資料 8）…2.27 秒/回・18.32 モーラ/回

このことから，首振り動作は談話への積極的参加の姿勢を表すひとつのサインであると言うことができると思われる。

これに対して外国人留学生の場合は，実質的発話中に比べてあいづち的発話中での首振り動作の頻度は下がっている（表 6 参照）。どの資料も話が弾んでおり，これでは対話の相手に話がつまらないのではないかという誤解を与える可能性がある。この点が，今後の日本語教育に残された課題のひとつと言えるだろう。

〈表 6〉

		頻度（秒/回）	頻度（モーラ/回）
R1	資料 9	2.05	12.78
R2	資料10	2.19	13.91
	資料11	2.97	21.63

3－5　話し手の首振り動作の現われる位置

3－5－1　話し手の首振り動作の現わそる位置

日本語の談話における話し手の頭部の動きについて，メイナード（1987）では「聞き手に相づちを送りやすくするコンテクトを作り出す」と共に

「話し手が話の流れをコンマで切る様に，文節の切れ目でよく見うけられ」るとしている。また杉戸（1987）では「初出語句（実質的発話中に初めて現われる名詞的要素）」を含む発話は，聞き手のあいづち行動を含め，話し手自身の頭部の動きを添えられる割合が高いということが指摘されている。

本稿では，メイナード（1987）の「文節の切れ目」をヒントに，実質的発話を次の5つの部分に分けて，話し手・聞き手の首振り動作の現れ方を観察した。次の表は発話の各部分における首振り動作の出現量(回)とその割合(%)を表している。但し，本節で「発話」という場合はすべて実質的発話を表すこととし，途中で聞き手側から何らかの反応が返ってきても，話し手がその発話を以後も続ける時，完全に話し手が交替するまでを1発話と考えることとした。

〈表7〉【日本人学生】

	発話を始める時①	発話中のポーズの前②	発話中のポーズの後③	その他の発話中④	発話を終える前⑤	合　計
出　現　量	88	297	71	135	136	727
出現量全体に対する割合	12.11	40.85	9.77	18.57	18.71	100

〈表8〉【外国人留学生】

	発話を始める時①	発話中のポーズの前②	発話中のポーズの後③	その他の発話中④	発話を終える前⑤	合　計
出　現　量	22	27	40	68	9	166
出現量全体に対する割合	13.25	16.27	24.10	40.96	5.42	100

〈表7〉から，日本人学生の場合，話し手の首振り動作は，

②発話中のポーズの前

⑤発話を終える前

の部分で最も多く，前述の「文節の切れ目」と一致する。一方，外国人留学生の首振り動作が最も多く現れるのは，

④その他の発話中／③発話中のポーズの後

で「文節の切れ目」とは直接関係がなく，日本人学生とは明らかの場合，

首振り動作が多いことがわかる。

3－5－2　首振り動作の現われる位置とその種類

それでは，話し手はどんな時にどのような首振り動作を行っているのだろうか。前項で表した首振り動作の現われる位置別に，多く現われる首振り動作を調べてみた。以下，箇条書きにして示す。但し，Nは日本人学生を，Rは外国人留学生を表すこととする。

①発話を始める時……N・RともB1，bFが多い。

②発話中のポーズの前……N・RともF1，bFが多い。

③発話中のポーズの後……NはF1，B1が多い。R1はB1のみに集中している。

④ポーズ付近以外の発話中…N・RともF1，bF，B1に3分されている。

⑤発話を終える時……NはF1が多い。R1・R2はFタイプ中に散在している。

以上のことから，日本語の談話において「文節の切れ目」（②・⑤）では，Fタイプの動作が，①・③のような「文節の始め」とでも言うべき部分ではBタイプの動作が多く行われると言えよう。一般に，Fタイプは発話に長短の休止を入れる時（ポーズもしくは発話の終了）の指標であり，Bタイプは発話の開始・継続の指標となると考えられる。

3－5－3　話し手の首振り動作のタイミング

更に話し手の首振り動作を観察していくと，「文節の切れ目」・「文節の始め」の各部分で，『首の振り方』に一定の法則性らしきものがあることがわかってきた。

まず「文節の切れ目」すなわち「②発話中のポーズの前」・「⑤発話を終える前」の両部分に多いFタイプの首振り動作について述べていこう。日本人学生の場合，首を振り下ろした時の「打点」は，ポーズ直前の最終シラブルに集中しており，その確率は，実に96.11%にも上る。一方「打点」が最終シラブルに来なかった例は，全386例中わずか15例に過ぎない。これに対して2人の留学生の場合，首振り動作の「打点」が最終シラブルに

来る確率は，R 1 が 30.00%，R 2 が 19.61%と非常に低くなっている。今まで述べてきた首振り動作の種類・量・頻度・位置の中で，日本人学生と最も大きく異なる面だと言える。

またこの部分では，対話の相手からあいづち等の何らかの反応が返ってくる確率は，58.81% と半数を越えることもわかった。発話継続中にポーズを伴う形式としては，「〜けど」・「〜とか」・関西弁語尾の「やんか」「やねん」・その他終助詞・間投助詞や，それらの形式の語末・句末の音声の引き伸ばしなどが多く見られた。語末・句末の音声の引き伸ばしは 6 割近い高率でポーズを伴うようだが，その他の形式ではほぼ半々の確率であった。

以下に「打点」の具体例を示す。

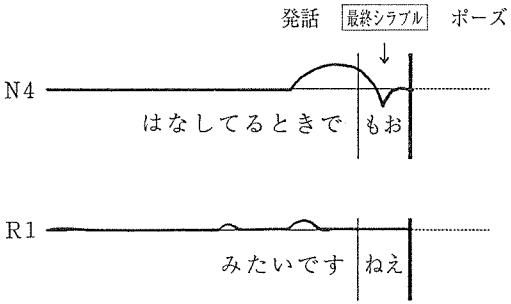


図 2　資料 9 より

次に，「文節の切れ目」に比べて数こそ少ないが，「文節の始め」すなわち「①発話を始める時」・「③発話中のポーズの後」に多いBタイプの動作について見ていく。すなわち，「文節の始め」に現れるBタイプの動作では，首を振り上げる時の「始点」が，談話中の名詞・代名詞・形容詞・動詞・副詞など，いわゆる自立語の語頭のシラブルに来るのである。このBタイプの動作の「始点」の位置に関しては，日本人学生と 2 人の留学生の間にそれほど大きな差は見られない。しかし，前述のとおり留学生 2 人は，発話中のポーズ付近以外の部分に首振り動作を伴う確率が日本人よりはるかに高い。このため R1・R 2 は発話しながら始終，首を振っていることになり，話し方がどこかぎこちなく感じられるのだと思われる。

但し，B動作の後に連続してF動作が行われる場合（bF：頷く前に頭を後に倒して，勢いをつけて頷く）は，その限りではなく，F動作の頷き

の「打点」の2〜5シラブル前に「始点」が来ることが多い。このことは，ｂＦ動作がＦタイプの動作であるということを示していると考えている。以下，「始点」の具体例を示す。

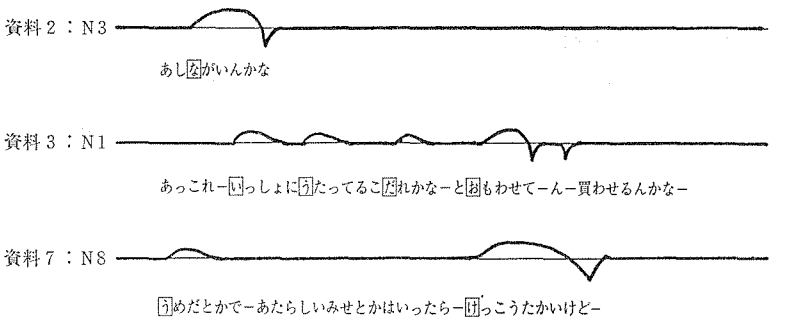


図３　□はＢ動作が共起した自立語の語頭のシラブル

３−６　ここまでのまとめ

以上，対話に現れる首振り動作について，その量・種類・出現頻度・位置（タイミング）をそれぞれ算出し，分析してきた。その結果，日本語の談話（本稿では対話）における首振り動作について以下のことがわかってきた。

まず，首振り動作には大きく分けてＦタイプ（前振り）とＢタイプ（後振り）の動作があり，話し手の動作・聞き手の動作双方でＦタイプが全体の８割を占めている。首振り動作は平均２に１回，15モーラに１回行われ，話し手よりも聞き手の頻度の方が若干高い。これは日本語の談話においては，聞き手の働き掛けが重要な意味を持つことを表すと共に，「共話」（水谷・1984）という特徴が非言語行動にもはっきりと現れていることを示していると言えよう。

また，首振り動作は言語行動とも深く関わっている。話し手の実質的発話と共起する場合，Ｆタイプは主に「文節の切れ目」に現れ，話し手が自らの発話に何らかの休止が入る際の合図となっている。その際，Ｆ動作の「打点」はポーズ直前の最終シラブルに来るようコントロールされている。この時聞き手からは，58.81％の確率で何らかの反応が返ってくる。一方

Bタイプは，Fタイプに比べて頻繁には用いられないため，却って聞き手の注意を引くことができる。従って，発話を始めようとする時，或いは発話を続けようとする際の合図として使われるのである。この時，Bタイプの動作は自立語の語頭のシラブルを「始点」とするのである。

このように，話し手・聞き手が首振り動作を特定の位置で行うことで，発話に日本語独特のリズムが生まれてくるようである。つまり，首振り動作はピッチやイントネーションと共に，日本語のリズムと深く関わっているのである。

尚，2人の留学生は，首振り動作の量・種類・頻度では日本人学生とさほど差はなかった。しかし，日本人学生と大きく異なったのは，やはり首振り動作のタイミングであった。今後，日本語教育の分野において学習者のコミュニケーション能力の向上を図るためにも，言語面だけでなく，非言語面からも日本語の特徴を捉えていくことが必要である。

4. 談話の進展と発話の受け継ぎ

4－1　発話権の移動とは

ここで発話権の移動とは，杉戸氏のいう「実質的発話」を行なっている話者が交替することを意味する。発話権の移動にはそれまで聞き手だった相手の「割り込み」によって話し手が発話権を奪われる場合と，話し手自らが相手に発話権を「譲渡」する場合とが考えられる。また，発話が一旦途切れた後で再び同じ話者が発話を始める場合や，聞き手の「割り込み」に対して，話し手が自分の発話をやめずに続ける場合等，結果的に発話権が移動しない場合もある。

本節では，発話権の移動回数と共に，一回当りの発話の長さが談話の進展度と何らかの相関関係を持つものと仮定し，各資料における発話権の移動状況を調べることにした。

4－2　談話の進展と発話権の移動・発話の長さ

各資料における発話権の移動回数は，平均27.45回で，1回の実質的発話の長さは平均37.19拍となっている。各資料毎の数値は以下の通りである。

	発話権の移動回数	1回当りの実質的発話の長さ
資料1	10	平均64.69拍（N1…57.83拍，N2…71.55拍）
資料2	**57**	平均**20.66拍**（N1…19.52拍，N3…21.81拍）
資料3	28	平均36.53拍（N1…51.16拍，N4…21.90拍）
資料4	18	平均49.80拍（N3…62.83拍，N4…36.77拍）
資料5	**24**	平均**29.81拍**（N4…25.14拍，N5…34.47拍）
資料6	17	平均45.98拍（N4…21.42拍，N6…70.55拍）
資料7	23	平均38.14拍（N7…19.14拍，N8…57.13拍）
資料8	**34**	平均**29.71拍**（N9…44.14拍，N10…15.27拍）
資料9	19	平均52.50拍（R1…59.00拍，N4…46.00拍）
資料10	**40**	平均**15.28拍**（R2…18.38拍，N4…12.17拍）
資料11	**32**	平均**24.40拍**（R2…30.90拍，N5…17.90拍）

個々の数値を比較してみると，資料1・3・4・6・7に対して資料2・5・8は発話権の移動回数がかなり多く，1回当りの発話の長さも20拍前後と非常に短くなっている。資料2・5・8の対話は，前章で述べたとおり盛り上がりに欠け停滞している。全体的に見て，談話がスムーズに進展している対話では，1回の実質的発話は50拍前後かそれ以上続き，まとまった内容を述べるのが普通である。1回の実質的発話が短く，発話権の移動が激しいこのような場合，会話は途切れがちで談話の参加者がその談話に対する積極性に欠けていることを物語っていると言えよう。

資料10・11でも対話者双方の1回の発話は非常に短くなっている。これは，R2がまだ日本語の談話に慣れていないためだと思われる。つまり，R2は発話中に聞き手からあいづちが入ると話しにくいようで，時に発話を中断する形で止めてしまっていた。R1に比べて日本滞在期間が短いR2はまだ日本語の談話に慣れていなかったようである。

4－3　発話スピードと談話の進展

従来から，発話権の受け渡しのサインとして話すスピードの変化が挙げられてきた。本稿でも談話の状態を知るひとつの尺度として発話中と発話末での話すスピードを比較してみた。但し，3秒以上発話者の交替がない

実質的発話についてのみ調べた。その結果，発話中と発話末での話すスピードの差は平均して4.64モーラ/秒に上り，明らかに発話末で遅くなることがわかった。水谷氏の研究では，談話中の1文節は約3〜5音節であり，発話中と発話末とでは，約1文節分話すスピードに差があることを示している。この現象は早口であるなしに関わらず見られるようである。しかし資料2・5・8など談話が停滞している場合はこの差が少なく（2モーラ），留学生の場合は更に差がなかった。(0.5〜2.0モーラ/秒)

一般に談話が停滞してくると，談話の参加者間で発話権の譲り合い状態が続き，発話が途切れがちになったり，短い発話の応酬が見られたりする。また発話スピードにめりはりがないためダラダラとした印象を与えるのである。

5. 対話における視線

5－1　話し手・聞き手における視線の量的差異

従来から，アメリカの研究等において視線は，話している時より聞いている時の方が量的に多いとされてきた。『まなざしの心理学』(1984) によると，ケンドン (1967) では，聞き手は長い間相手を見るが，話し手は相手を見る時間と見ない時間とが半々になると指摘しているという。また大曾美恵子氏によると英語の場合，「話している時より聞いている時の方が相手を見ている時間が長く，話している時間の約六〇%に対し，聞いている時は約八七%」だというデータ (Duncan and Fiske 1977) があるという (1988)。

本章では，実質的発話中とあいづち的発話中それぞれについて対話の相手に視線を送る量（時間＝秒）を調べ，それぞれの割合を算出した。計算方法は次のとおりである。

(実質的発話中の視線)÷(実質的発話時間)×100＝(%)

(あいづち的発話中の視線)÷(対話の相手の実質的発話時間)×100
＝(%)

その結果，日本人学生の場合，実質的発話中に相手を見る割合は全体の

57.15%で，あいづち的発話の場合は80.80%に上ることがわかった。興味深いことに，この数値は前述の英語の場合のデータと完全に一致している。

5－2　談話の進展と視線の量

前述の『まなざしの心理学』によると，ケンドンはまた流暢な会話では話し手は相手をあまり見ず(その割合は26%)，滞りがちな会話では相手を頻般に見る（割合は73%）と指摘しているという。

前節で算出したデータからは，資料2に関して若干，比率が低くなる傾向が見られた他には，談話の進展度による話し手の視線の量に明確な差は見られなかった。視線を送る回数についても同様に調べてみたが，やはりこれといって差は見られなかった。視線の量に関しては個人差が大きいため，調査には一層工夫が必要であると思われる。

5－3－1　視線を送る位置と対話における視線の役割

視線にはどのような役割があるのだろうか。視線を相手に向ける位置を以下のように分類して話し手・聞き手にそれぞれについて視線を相手に送った回数とその割合を調べた。すなわち，「①実質的発話を始める時」・「②発話中のポーズ付近」・「③それ以外の発話中」・「④発話を終える前」・「⑤発話を終えた後」の5箇所である。

話し手の場合，視線を送る回数は③の発話中と②のポーズ付近でかなり多くなる。③は全体の37.08%で最も多く，②は27.11%であった。それに対して①は問いかけに対する応答やそれに準ずる発言以外ではほとんど見られなかった。④⑤の部分で話し手が視線を送る場合は問いかけの場合を含めて，相手の発言を期待している時に多いと思われる。また聞き手の場合は，③と②の位置だけで90%を越えることがわかった。

このような傾向については，ケンドン（1967）に既に報告がある（『まなざしの心理学』)。ケンドン氏によると，5秒以上の発話の場合，話し手は話し始めでは目を逸らし，話し終わりでは聞き手の反応を観察するために相手を見る。聞き手はもっと話してほしい時には相手を凝視し，相手の話に興味がなくなるか，発言したくなった時に目を逸らすという。ケンドンの研究は英語によるものであるが，日本語の場合にも同様の傾向が見られ

るのは非常に興味深い。

このように談話行動における視線の役割の研究には心理学に頼らざるを得ない面が多々あり，現象面だけでは限界があるように思われる。しかしまた，同書には「視線はあくまでも，他のコミュニケーションのチャンネルと連合して意味を補強する」(アージャイル＆クック1976) ものであるという指摘もあり，心理学的観点による研究に加えて，視線と他の非言語行動との共起関係など現象面での研究に残された課題は多い。

5－3－2　視線と首振り動作によるあいづち行動の誘発

前項で述べたとおり，話し手・聞き手双方の視線は，「発話中のポーズ付近(②)」と「その他の発話中(③)」で多く対話の相手に送られている。この発話中の②③の位置は，3－5－2 で述べた「首振り動作が多く現れる位置」と一致している。そこで，発話中の②③の部分で，話し手が自らの実質的発話に添える首振り動作に視線が加わった場合，聞き手から何らかの反応が返ってくる確率を調べてみた。聞き手の反応には音声を伴わない首振り動作も含まれている。

3－5－2 で述べたとおり，②のポーズ付近での首振り動作に対しては58.81%の確率で聞き手から何らかの反応が返ってきた。そして首振り動作に視線が加わった場合は，発話中のポーズ付近以外の部分も含めて 83.58%の高率で聞き手から何らかの反応が返ってくることがわかった。

このことから，話し手が聞き手に送る視線は，聞き手の反応を求める上で，言い換えれば，聞き手のあいづち行動を誘発する上で大きな役割を果たしていると言える。

6. お　わ　り　に

以上，実際の対話場面の録画資料に基づいて，首振り動作・視線・発話スピードといった非言語行動の一面について，記述・分析を試みた。そして，日本語の談話を語る上で非言語行動が不可欠な構成要素となっていることを改めて痛感した。

日本語教育の分野においても，談話行動の研究は欠かせないものである。

今回の分析では日本語のリズムが言語・非言語の両行動から形作られていることが確認できた。また水谷氏の言う「共話」という日本語の談話の特徴が，言語行動だけでなく非言語行動においても色濃く現われることがわかり興味深かった。このように，学習者のコミュニケーション能力の向上を図るためには，言語面だけでなく非言語面からも日本語の特徴を把握して，教育に生かしていく必要があると思われる。

そのためには，被調査者の社会的要因によって非言語行動にどのようにバリエーションが生まれるかについても分析を進める必要がある。年齢・職業・性別等によって有意差があるなら，そこから首振り動作の種類（Fタイプ・Bタイプ）や量，頻度の持つ役割を明らかにすることもできるだろう。

しかし本稿で取り扱った非言語行動は，談話行動の中のほんの一部に過ぎず，今後に残された課題が多いことは言うまでもない。また各資料もそれぞれ3分ずつと短いため，談話全体の特徴を把握するのに充分な長さとは言えないこともまた事実である。広く談話行動の研究を進めるためには，談話全体を俯瞰した上で，より総合的な非言語行動の記述を行なうと共に，言語行動との関係を明らかにしていく必要がある。更に，その機能等については現象面からだけでなく心理学的観点からのアプローチも重要であると思われる。

参考文献

今石幸子　1991『談話における聞き手の行動――相づちを中心にして――』平成2年度・大阪大学文学部日本学科卒業論文

江川　清　1978 a「談話行動の実験言語社会学的研究」『研究報告集』1（国立国語研究所報告62）

江川　清　1978 b「身ぶりの記述について」『研究報告集』1（国立国語研究所報告62）

江川　清　1987「動作・身振りの現れ方」（国語研1987所収）

大曾美恵子　1988「英語のあいづち」『日本語学』7-3

黒崎良昭　1987「談話進行上の相づちの運用と機能」『国語学』150集

国立国語研究所　1987『談話行動の諸相――座談資料の分析』（国立国語研究所報告92）三省堂

コンドン，J．1977「人間行動の理解をめざして——非言語的コミュニケーションの研究」監修野元菊雄・野林正路『日本語と文化・社会4　ことばとシンボル』三省堂

ザトラウスキー，P．1989「あいづちとそのリズム」『月刊日本語』2-3

杉戸清樹　1978「身振りを記録する——『変位』の記録表試案」『研究報告集1』（国立国語研究所報告62）

杉戸清樹　1987「発話のうけつぎ」（国立国語研究所1987所収）

杉戸清樹　1988「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち——談話行動における非言語的表現」『日本語教育』67号

杉戸清樹・沢木幹栄　1977「衣服を買う時の言語行動——その諸側面の観察」『言語生活』314

杉戸清樹・沢木幹栄　1979「言語行動の記述——買い物行動における話しことばの諸側面」『講座言語第3巻　言語と行動』大修館書店

林　四郎　1973「表現行動のモデル」『国語学』92〔『言語表現の構造』所収　1974明治書院〕

福井康之　1984『まなざしの心理学——視線と人間関係——』創元社

堀口純子　1990「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71

本名信行　1989「言語学のキーワード・31〈社会言語学〉」『月刊言語』18-11

松田陽子　1988「対話の日本語教育学——あいづちに関連して」『日本語学』7-3

水谷信子　1984「日本語教育と話しことばの実態——あいづちの分析」『金田一春彦博士古稀記念論文集2言語学編』三省堂

水谷信子　1988「あいづち論」『日本語学』7-3

南不二男　1987「談話行動論」（国立国語研究所1987所収）

メイナード・泉子　1987「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』16-12

米田正人　1978「談話行動の計量的研究について」『研究報告集』1（国立国語研究所報告62）

【付記】　本稿で取り扱った談話資料は，前掲の今石幸子氏と協同で収録したものを使用している。また，本稿をなすにあたり，インフォーマントとして談話資料の収録にご協力頂いた方々に心から御礼申し上げます。

《添付資料》

〔No. 1〕：首振り動作の出現量「3－3－1 実質的発話の場合」p. 40 参照）

		発話量	首振り回数	F1	F2	F3	bF	B1	B2	B3	fB
資料1	J 1	347	28	9	—	—	9	6	1	—	3
	J 2	787	41	20	4	—	7	7	1	—	2
資料2	J 1	663	39	14	—	1	5	16	1	1	1
	J 3	676	21	5	2	—	6	7	—	—	1
資料3	J 1	972	68	20	3	—	23	15	2	—	5
	J 4	350	29	4	1	1	19	3	—	—	1
資料4	J 3	754	46	18	1	—	16	11	—	—	—
	J 4	478	32	15	1	—	13	3	—	—	—
資料5	J 4	352	30	10	—	—	14	5	—	—	1
	J 5	655	22	7	1	2	9	3	—	—	—
資料6	J 4	257	17	10	—	—	7	—	—	—	—
	J 6	776	64	31	4	1	23	5	—	—	—
資料7	J 7	268	20	7	2	—	7	—	4	—	—
	J 8	857	75	26	4	1	26	4	13	—	1
資料8	J 9	971	51	18	—	—	21	12	—	—	—
	J 10	336	35	11	2	1	10	10	1	—	—
資料9	J 4	460	39	7	4	—	24	4	—	—	—
	R 1	590	71	15	1	—	8	35	5	6	1
資料10	J 4	292	32	8	3	—	19	2	—	—	—
	R 2	533	50	16	4	2	8	15	3	—	2
資料11	J 5	411	38	7	4	3	18	4	1	—	1
	R 2	587	45	15	—	1	17	10	1	1	—

〔No. 2〕：首振り動作の出現量「3－3－2 あいづち的発話の場合」p. 41 参照）

		首振り回数	F1	F2	F3	bF	B1	B2	B3	fB	無動
資料1	J 1	63	27	7	8	13	3	—	2	1	2
	J 2	32	18	7	3	2	1	—	—	—	1
資料2	J 1	38	19	2	1	2	1	—	—	1	12
	J 3	32	10	1	—	1	—	—	—	—	20
資料3	J 1	44	27	5	—	5	1	—	1	2	3
	J 4	74	25	18	8	18	1	—	—	2	2
資料4	J 3	29	17	5	—	1	—	—	—	—	6
	J 4	52	32	2	—	12	1	—	—	5	—

資料 5	J 4	35	22	3	1	4	3	—	—	1	1
	J 5	34	18	2	7	2	—	—	—	—	5
資料 6	J 4	73	25	13	8	23	—	1	—	2	1
	J 6	31	19	5	4	—	—	—	—	1	2
資料 7	J 7	67	36	12	12	1	1	—	—	—	5
	J 8	33	11	5	7	5	—	—	—	3	2
資料 8	J 9	25	12	3	2	3	2	—	—	—	3
	J 10	53	20	18	3	4	1	2	—	3	2
資料 9	J 4	80	33	11	6	16	5	3	—	4	2
	R 1	36	2	1	1	2	3	5	20	—	2
資料10	J 4	69	19	19	10	13	4	—	—	2	2
	R 2	21	10	3	6	1	—	—	—	—	1
資料11	J 5	58	7	7	27	7	2	—	1	3	4
	R 2	19	4	6	2	3	—	—	—	2	2

〔No. 3〕：首振り動作の頻度「3－4－2 実質的発話の場合」p. 42 参照)

		実質的発話時間(秒)	実質的発話の総量(モーラ)	首振り動作数の総計(回)	頻度(秒／回)	頻度(モーラ/回)
資料 1	J 1	55.0	347	28	1.96	12.39
	J 2	106.0	787	41	2.59	19.20
資料 2	J 1	86.6	663	39	2.22	17.00
	J 3	92.3	676	21	4.40	32.19
資料 3	J 1	134.2	972	68	1.97	14.29
	J 4	53.0	350	29	1.83	12.07
資料 4	J 3	107.1	754	46	2.33	16.39
	J 4	63.8	478	32	1.99	14.94
資料 5	J 4	53.1	352	30	1.77	11.73
	J 5	86.9	655	22	3.59	29.77
資料 6	J 4	33.9	257	17	1.99	15.12
	J 6	114.7	776	64	1.79	12.13
資料 7	J 7	37.6	268	20	1.88	13.40
	J 8	119.2	857	75	1.59	11.43
資料 8	J 9	120.4	971	51	2.36	19.04
	J 10	41.2	336	35	1.18	9.60
資料 9	J 4	73.7	460	39	1.89	11.79
	R 1	103.5	590	71	1.46	8.31

資料10	J 4	46.0	292	32	1.44	9.13
	R 2	101.1	533	50	2.02	10.66
資料11	J 5	56.4	411	38	1.48	10.82
	R 2	107.4	587	45	2.39	13.04

〔No. 4〕：首振り動作の頻度「3－4－3 あいづち的発話の場合」p. 43 参照)

		対話の相手の実質的発話時間(秒)	同実質的発話の総量(ーラ)	首振り動作数の総計(回)	頻度(秒/回)	頻度(モーラ/回)
資料 1	J 1	106.0	787	63	1.68	12.49
	J 2	55.0	347	32	1.72	10.84
資料 2	J 1	92.3	676	38	2.43	17.79
	J 3	86.6	663	32	2.71	20.72
資料 3	J 1	53.0	350	44	1.21	7.95
	J 4	134.2	972	74	1.81	13.14
資料 4	J 3	63.8	478	29	2.20	16.48
	J 4	107.1	754	52	2.06	14.50
資料 5	J 4	86.9	655	35	2.48	18.71
	J 5	53.1	352	34	1.56	10.35
資料 6	J 4	114.7	776	73	1.57	10.63
	J 6	33.9	257	31	1.09	8.29
資料 7	J 7	119.2	857	67	1.78	12.79
	J 8	37.6	268	33	1.14	8.12
資料 8	J 9	41.2	336	25	1.65	13.44
	J 10	120.4	971	53	2.27	18.32
資料 9	J 4	103.5	590	80	1.29	7.38
	R 1	73.7	460	36	2.05	12.78
資料10	J 4	101.1	533	69	1.47	7.72
	R 2	46.0	292	21	2.19	13.91
資料11	J 5	107.4	587	58	1.85	10.12
	R 2	56.4	411	19	2.97	21.63

(文学部日本学科卒業生)